# 「御嶽文庫」の戦後誌収集

## 集書日誌40

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

西武新宿線下井草駅近くの芳林文庫から、戦後誌創刊号十数冊を得た。中京周辺地区発行の雑誌が多く、このところ、敗戦直後の地方文化運動の調査を続けていることもあって大いに助かった。いずれも表紙に「御嶽文庫」なる横長のゴム印が押してあり、その枠内に〈雑 95 創〉のようなペン書きの記入がある。またそのほとんどに鉛筆書きで、表紙の右上に購入月日と購入場所の書き込みがあって、たったそれだけのことなのだが、あの、敗戦直後の物心両面にわたる拠りどころのない飢えの時代の臨場感を喚び起こさせた。

あの時代、雑誌記載の刊行月日と実際の流通月日とのズレの幅が甚しく、不規則で、地域差もあって、その特定は、かなり厄介な事で、その意味でも、貴重な書き込みに思える。

東京発行の『文化娯楽』（昭21・5・10泰文館）と名古屋発行の『農耕之友』（昭21・7・1　農耕之友社）は、共に〈7／23、多治見駅〉と記され、弘済会の売店での購入でもあろうか。大阪発行の『大さか』（昭21・10・1　博多成象堂）は、〈10／18、大阪〉とあり、東京発行の『ミュージック』（昭21・11・1、アポロ出版社）は、〈12／20、丸善〉とあるが、何処の丸善であろうか。同じく『ひまわり』（昭22・1・1、ひまわり社）は〈2／18、川瀬〉と読める。東京発行の『新文庫』（昭22・5・15、鉄道弘済会新文庫社）には、〈6／5、富山駅〉とあり、東京発行の『中国と日本』（昭22・7・1、復興印書館）は、〈8／4、名鉄〉とあり、百貨店内の書店での購入であろうか。名古屋発行の『パレス』（昭22・6・1、パレス社）は、「ユーモア探偵小説集」特輯で、〈6／8、丸榮〉とあり、同じく『平安』（昭22・5・1、平安出版部）は〈10／28、熱田〉とある。ところで、多治見発行の『藝文座』（昭21・8・15、中部藝能連盟）には、ゴム印内の記載はあるが、鉛筆の日付、書き込みが無い。

「御嶽文庫」の所在は、多治見市周辺なのかもしれない。「御嶽文庫」はおそらく、中央アルプスの主座御嶽山の大宮を中心とする御嶽教の教会・説教所もしくは講社に付置された文庫ではなかろうか。御嶽教は、東京・大阪に教庁を持ち、戦前までは、神道諸派の中で第三位の教勢であったから、濃飛地方に教会・講社があっても不思議はないだろう。

戦後誌探索も三十数年を経たものの、八幡の藪ほどではないが、奥行きが深くてなかなか完結させるに至らず、いましばらく時間がかかりそうだ。

創刊号はまだしも、終刊の確かめが難物で、篤志の古書肆の協力が得られるとありがたいのだが……。